みちしるべ

第132号

人権・同和問題啓発広報
人権同和政策課
☎22-7506
同和教育・啓発推進会議

市では、同和問題をはじめとするあらゆる差別の解消に向けて、教育・啓発に取り組んでいます。今回は、8月に開催した「同和教育講演会」と、さまざまな人権問題をテーマに年4回シリーズで開催している「人権・同和教育基礎講座」の様子を紹介します

第48回出雲市同和教育講演会

8月22日、出雲市民会館で、山口県人権啓発センター事務局長の川口泰司（かわぐちやすし）さんをお迎えし、「差別っていったいなんやねん？～部落差別は、いま～」と題して講演をしていただきました。

川口さんは、ご自身の体験談を交えながらお話をされ、約1，000人の参加者の皆さんが熱心に聞き入りました。

川口さんは講演の中で、「差別には、結婚差別や就職差別、差別発言などの差別行為（〝見える差別〟）だけでなく、見ようとしなければ見えない差別があります。この〝見えない差別〟を見抜く力をつけてほしいです。この〝見えない差別〟は、差別されている当事者でも学んでいなければ見えず、（川口さんの）祖母は、自分は差別なんて受けたことがないと言っています。祖母は、学校にも行けず、若くして結婚をし、ずっと家にいて、部落内だけの人間関係しかないため、差別行為を受けたことがありません。しかし、実際は、差別によって、教育を奪われ、人間関係を狭められ、そして生き方を狭められていますし、このこと自体が差別です。部落差別があるのかないのかを議論するときに、単なる差別事象とか差別行為のレベルではなく、そういう深いところまで読み取る力をつけるべきです。」と語られました。

また最後には、なぜ人権・同和教育をするのかについて、ビーカーの中に入れた泥水に例えてお話をされました。

「ビーカーの中の泥水の泥は、私達に刷り込まれている色んな差別的な意識や文化、価値観などのドロドロしたものです。しばらく放っておくと、泥水の泥は沈殿し、上から見ると、きれいな水になります。それを見て、『私は差別なんかしていない。』『もうこの町には差別とかないです。』と言うようになります。でも、泥は下に沈殿しているだけです。人権・同和教育は、このビーカーの泥水を混ぜる作業です。混ぜ続けると、対流が起きて、泥が浮き上がってきます。つまり、学べば学ぶほど、差別がなにか見抜けるようになります。それを金魚すくいの網ですくい続けるのです。人は、すぐには変わりません。でも、少しずつでいいのです。続けることで、やがては純粋なきれいな水になります。身内の結婚や不動産購入など利害が絡んだ時や自分の心に余裕がなくなった時に、見える差別が起こります。それが差別事象であり、いじめであり、DVです。お互いが不幸になってからでは遅いです。だから、今のうちに取って、取って、取り除きませんか？自分たちのために。」

人権・同和教育基礎講座

シリーズ第1回目は、9月12日、出雲医療看護専門学校非常勤講師の金山千夜子（かなやまちやこ）さんを講師に招き、「差別や偏見のない街づくりを目指して～精神科看護の実践から～」と題して講演をしていただきました。

近年患者数が増加している精神疾患について、長年勤務された海星病院（医療法人同仁会）の精神科看護を実践された経験を交えながら、わかりやすくお話ししていただき、精神疾患がある人への関わり方について改めて考えるよい機会となりました。

例えば、精神疾患のある人は、「傘をさしかけてくれるだけではなく、ともに濡れて欲しい」。つまり、「病」を雨に例えるなら、当事者への指導や声をかけたりするだけではなく、当事者とその取り巻く環境をすべてわかったうえで、一緒になって考えて欲しいと思っていること。また、認知症の人についても、記憶は衰えるが、喜怒哀楽、人との絆、快・不快を感ずる能力は保たれており、そうしたことを配慮して関わることなど、相手の気持ちを考え、人権を尊重した関わり方を学びました。

〔参加者の声〕

●うつ病、統合失調症、認知症の方の事例をあげてお話されましたが、その方に対して同じ人権をもった一人の人間として大切にかかわることが大事だと思いました。また地域ぐるみで支え合うことが大事だと思いました。病気の予防も大切ですが、病気の方たちが幸せに生きることのできる社会をつくっていくことが大事だと思いました。（40代男性）

●事例を盛り込んでのとても楽しい話で、退屈することなくあっという間の時間でした。認知症の祖母が今年5月に亡くなりました。もう少し早く、このお話が聞けたら、祖母への関わりも違っていたように思います。話を聞きながら、〝おばあちゃんごめんね〟と思い、涙してしまいました。これから出会う認知症の方、心の病の方を大切にしていきたいです。ありがとうございました。（30代女性）

第4回 人権・同和教育基礎講座

とき 12月12日(土) 9：30～11：30

ところ 市役所 くにびき大ホール

講師 自死遺族自助グループ「しまね分かち合いの会・虹」
代表 桑原（くわばら） 正好（しょうこ）さん

演題 「自死という社会的非難のまなざし」

桑原正好さん

2006年に息子を「自死」で亡くした後、自死遺族の会「しまね分かち合いの会・虹」を立ち上げ、「遺族のつどい」の開催や、「自死」に対する社会的な偏見をなくす活動を通して、自ら逝った人の尊厳と自死遺族の人権についてお話をしていただきます。

参加者の声 同和教育講演会

＊見えない差別に気づく、見抜く力を皆がつけていき、幸せな社会になるよう、取り組んでいかないといけないと痛感しました。（50代男性）

＊見えない差別を見抜く力をつけることはとても大事なことだと思います。正しく学ぶことで、差別をされている人も差別をしている人も、苦しまずにありのままの自分を出して生きていけるということをしっかり考えていきたいと思います。（40代女性）

＊差別はない、部落問題は昔のこと、遠い地方のことと、正直今日まで思っていました。差別行為がある／ないではなく、状況や構造から見抜く力を少しずつつけていきたいと思いました。（20代女性）

＊根強く残っている差別意識の深さを改めて実感する思いをした。今も残っている差別問題について学ぶ機会を重ねていくことを通して、人権意識を高めていくことの必要性を強くもちました。（70代以上男性）